



Title	「情報のなわばり理論」における「のだ」の位置づけ
Author(s)	中野, 友理
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 8, 28-45
Issue Date	2004-12
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/45644
Type	bulletin (article)
File Information	BISC008_003.pdf



[Instructions for use](#)

「情報のなわばり理論」における「のだ」の位置づけ

中野友理

要 旨

本稿では、従来神尾(2002)が不可能としてきた「情報のなわ張り理論」における「のだ」文の位置づけを改めて考察する。日本語の文末形式「のだ」は、文の情報が話し手のなわばりに属することを示す直接形や、逆に話し手のなわばりに属さないことを示す間接形等の文末形式とは異なる機能を持ち、「情報のなわ張り理論」での位置づけは難しいとされていた。これに対して本稿では、文の情報が話し手のなわばりに属していることを表す機能が「のだ」にあり、したがって「情報のなわ張り理論」においても位置づけが可能であることを述べる。同じく情報が話し手のなわばり内にあることを示す直接形と「のだ」の違いは以下の点にある。直接形の文では、ある情報が話し手のなわばり内にあるという話し手の判断が客観的視点からも成り立つと認められなければ、文が不自然になる。一方「のだ」文では、情報が話し手のなわばり内に属するかどうかの判断を客観的な視点からは必要としない。あくまで話し手の主観的判断で情報が話し手のなわばり内にあることを示す。「のだ」が間接形とともに用いられる場合がある理由も、「客観的には話し手のなわばりに属さないと思われる情報を話し手の主観的判断によって自身のなわばりに属する」ことを示すと考えれば矛盾はない。「情報のなわ張り理論」における「のだ」の位置づけは、これまで様々な視点から記述されてきた「のだ」の機能をより明確にするきっかけになるとと思われる。

〔キーワード〕 情報のなわ張り理論、「のだ」、心理文

1. はじめに

神尾(2002)は、ヒトや動物の行動に影響を及ぼすなわばりの概念が言語にも表れるという発想から「情報のなわばり理論」を主張し、Kamio(1979)からその理論を発展させてきた。「情報のなわ張り理論」(以下、

なわ張り理論)では、言語によって表出される情報が話し手と聞き手のどちらに所有されるものか、つまり、各個人に情報所有におけるなわ張りがあるとすれば、その情報はどちらのなわ張りに位置づけられるのかが、用いられる言語形式を左右すると考えられている。

言語情報における認知的な所有概念に関しては、なわ張り理論以前にも指示詞など単語レベルでは指摘されていたと神尾は述べている(神尾2002:11を参照)。しかしこれを文レベルまでに拡張し、また個別に研究されていた様々な言語現象を一つの理論に基づいて説明する可能性を見出した点で、なわ張り理論は画期的であった。ただし現在までのところ、なわ張り理論で説明がなされた言語形式は限られた範囲でしかない。今後、より広範囲の言語形式になわ張り理論が適用できることを検証する必要があると考える。その一つの試みとして本稿では、神尾(2002)がなわ張り理論において位置づけが難しいとした文末形式「のだ」を取り上げ、なわ張り理論と「のだ」が無関係とした根拠について改めて考察を加える。

まず次章において「情報のなわ張り理論」を紹介し、神尾(2002)での「のだ」文についての考察を見ていく。続いて第三章で神尾の考察を改めて検証する。なわ張り理論における「のだ」の位置づけが可能かどうかという結論を最終的に提示するのが本稿の目的である。

2. 神尾(2002)の「情報のなわ張り理論」

2.1 なわ張り理論における文末形式の選択

なわ張り理論とは、例えば次のような会話における文末形式の選択を説明するものである。次の(1)は、北海道旭川市の寒さについて聞いたことのあるAが旭川市出身のBに話しかける場面である。

(1) A: 旭川って寒いらしいですね。

B: ええ、寒いですよ。

「旭川は寒い」という情報をただ聞いて知っているだけであるAは、伝聞、推測の意味機能を持つ「らしい」を(1)で用いている。もちろん聞いただけとはいえ、Aが情報について強い確信を持っている場合、「旭川は寒いです」と言うこともあるだろう。しかし(1)の状況に限った場合、AがBに対して「旭川は寒いです」というと不自然になってしまう。

これをなわ張り理論で説明すると、話し手Aにとって「旭川は寒い」という情報は聞いて知っただけの確信できない情報、つまり話し手Aが完全に所有していない情報である。このような情報は話し手のなわ張り内に存在しないとすることができ、通常間接形と呼ばれる文末形式を用いて表出される。間接形とは不確定で断定不可能であることを表す表現であり、「らしい」「みたい」「かもしれない」「とされる」のような文末形式をいう（神尾2002）。¹⁾次の(2)も間接形を用いた文である。

- (2) a. カナダはいいところらしい。
b. 今年の秋はもうすぐ来るようだ。 (神尾 2002 : 25)

一方(1)において話し手が旭川出身のBに移ると、間接形は用いられない。話し手Bは「旭川は寒い」ということを直接経験して確信しており、この情報は話し手Bのなわ張りに属しているからである。話し手のなわ張りに属した情報を表すには、間接形ではなく直接形が用いられる。直接形とは、「述語で言い切った文、それに「よ」「ぜ」「わ」などの終助詞が付加された文など、断定的かつ確定的な表現の文」（神尾2002 : 20）である。次の(3)のいずれも直接形を用いた文である。

- (3) a. 私、頭が痛い。
b. このお皿は欠けている。
c. こういうところは、特に力を入れて彫るんだ。
(神尾2002 : 30-31)

また(3)はいずれも丁寧体で発話されたとしても直接形であることに代わりはない。

では、どのような情報が話し手のなわ張りに入りやすいかということ、神尾(2002)では情報が得られる際の条件として次の(4)をあげている。これらの条件を多く満たすほど、その情報は話し手のなわ張りに属しているといえる。

- (4) a. 内的直接体験を表す情報
b. 外的直接体験を表す情報

c. 自己の専門または熟達領域に関する情報

d. 自己の個人情報

(神尾 2002: 32)

(1)におけるBの発話も、文が示す情報はかつて話し手自身が直接体験したものであり、(4)の条件bを満たしているといえる。また(3)の文についても、それぞれ(4)のいずれかの条件を満たしているので、話し手のなわ張りに属する情報とみなされる。

再度(1)のAの発話について考える。先ほども述べたようにAが「旭川は寒い」という情報について、直接体験して得たものではなくとも、(例えば専門分野に関わる情報のために)かなり確信的である場合が有り得る。その場合、この情報は話し手Aのなわ張りに属するとみなされ、直接形を用いて発話することができるだろう。

(5) (1)と同じ状況でのAの発話

a. *旭川は寒いです。

b. 旭川は寒いですよね。

(5)はどちらも直接形で表されている。しかし、(1)の状況において(5)aのように言うことは通常不自然であり、(5)bのように終助詞「よね」を必要とする。神尾(2002)によると、終助詞「ね」が文に伴った場合、話し手より聞き手のほうが(または話し手と聞き手が同程度に)当該の情報を認識していることを表すと述べている。したがって(1)で提示した状況においてAは、聞き手が「旭川は寒い」という情報を自身よりもよく認識していると想定しているため、直接形であれ間接形であれ、文末に「ね」を接続する必要がある。²⁾

神尾はこの他に文末の「だろう」(または「でしょう」)も情報が話し手のなわ張りに属していることを示す文形としてあげている。³⁾以上をまとめると、次の(6)のようになる。

(6) 神尾(2002)のなわ張り理論

ある情報の、 話し手・聞き手のなわ張りにおける位置	用いる文形
話し手内・聞き手外	直接形
話し手内・聞き手内 (聞き手の認識度 \geq 話し手の認識度)	直接形+「ね」
話し手内・聞き手内 (話し手の認識度 $>$ 聞き手の認識度)	「だろう」(下降調)
話し手内・聞き手内 (聞き手の認識度 $>$ 話し手の認識度)	「だろう」(上昇調)
話し手外・聞き手内	間接形+「ね」
話し手外・聞き手外	間接形

このように、ある情報が話し手または聞き手のなわ張り内にあるかどうかによって用いられる文末形式が選択されるというのがなわ張り理論の主張である。

2.2 なわ張り理論における「のだ」の位置づけ

2.1において、ある情報が話し手または聞き手のなわ張りに属するかによって文末形式が選択されるということを述べた。では、同じく文末に用いられる形式である「のだ」は、なわ張り理論においてどのような役割を果たすのか。本節では神尾(2002)がなわ張り理論における「のだ」の位置づけについてどう説明しているかを確認する。

神尾(2002)では特に「のだ」文だけを取り上げて考察した箇所があり、なわ張り理論における「のだ」文の位置づけは無理という結論が出されている。その根拠として、「のだ」は間接形的一种かと思える用法がある一方で、直接形と同じように断定を表す表現である点をあげている。したがって神尾は「「のだ」文には、情報のなわ張り理論が規定する文形の区別とは別次元の文形上の仕組みがあると考えられる。この意味において、「のだ」文はなわ張り理論とは無関係である」(神尾2002:70)と説明した。以下では神尾が「のだ」をなわ張り理論と無関係とする理由について述べる。

なわ張り理論の枠組みに「のだ」を加えることができない理由の一つめ

は、主語や主題として取り上げられた人物の心理を表す、いわゆる心理文（神尾2002：62を参照）における「のだ」の用法についてである。日本語においては、聞き手や第三者など話し手以外の心理を直接形で表すことが、小説などの特別な場合を除いて通常は不自然になる。

- (7) a. *国から手紙が来なくて、あの人はさびしい。
- b. 国から手紙が来なくて、あの人はさびしいようだ。
- c. 国から手紙が来なくて、あの人はさびしいんだ。

「あの人はさびしい」という第三者の心理状態は通常話し手には知り得ない情報であるので、話し手のなわ張りには属さない。したがって(7)aのように直接形で表すのは不自然だが、(7)bの間接形「ようだ」を伴った文は自然である。一方、話し手以外の心理を表した文に、(7)cのように「のだ」を接続しても文は自然になる。このように直接形と同様、断定の意味を持つはずの「のだ」が、心理文においては間接形と類似した働きをする。神尾は「のだ」が持つこの性質を取り上げ、「のだ」がなわ張り理論と無関係である理由の一つとした。

「のだ」がなわ張り理論で説明できないもう一つの理由として、直接形や、「ね」、「だろう」が用いられた文に「のだ」を接続できるのと同様、間接形にも接続が可能だという点があげられる。

- (8) a. ゆうべ雨が降ったんだ。
- b. ゆうべ雨が降ったんだね。
- c. ゆうべ雨が降ったんだろう？
- d. ゆうべ雨が降ったらしいんだ。

(8)でわかるように、「の(ん)だ」は直接形、終助詞「ね」、「だろう」、そして間接形の文末形式「らしい」の全てに接続可能である。神尾は以上の点を考察した結果、「のだ」が担う情報伝達の機能とは「得難い情報」を供給するという特別なものであるため、なわ張り理論とは無関係だという見解を示した。この「得難い情報」とは、「のだ」が「背後の事情」を表すという田野村（2000）の主張に基づくものである。

確かにこれまでのなわ張り理論の説明では、「のだ」を直接形とも間接

形ともみなすことはできない。しかし、仮に「のだ」がなわ張り理論の枠組みに取り入れることができないとしても、心理文に見られる「のだ」の用法をどう説明するかという疑問は十分に解決されないであろう。また「のだ」が神尾の述べるとおりに「得難い情報」を表すとしても、それは果たしてなわ張り理論とは無関係な機能であろうか。「のだ」となわ張り理論の関係を再度見直すために、本稿の考察を次章で述べる。

3. 考察

本章では、なわ張り理論のモデルに「のだ」が位置づけ不可能である理由を再度検討する。2.2で述べた、「のだ」がなわ張り理論の枠組みに入れることができない二つの根拠について、以下でそれぞれ考察することとする。

3.1 心理文と「のだ」

第二章で紹介したとおり、話し手以外の心理を表す文に直接形を用いるのは不適切である。しかし情報が話し手のなわ張りの外にあることを表す間接形、または「のだ」を用いることで話し手以外の心理を表すことが可能になる。このように心理文に関する性質だけを見ると、あたかも「のだ」に間接形と同じ働きがあるようだが、「のだ」と間接形は情報をどれだけ確信しているかという面では全く別の機能をもった文形であることは間違いない。以下の例を見てみよう。

Aが暗い顔をしている。Bは、Aの恋人が昨日外国に旅立ったということを知っているが、Bの友達である聞き手Cはそのことを知らない。「Aはどうしたんだろう」と心配するCに、話し手Bが(9)のように発話したとする。

- (9) a. *彼がいなくて、Aはきつとさびしいよ。
b. *彼がいなくて、Aはきつとさびしいようだよ。
c. 彼がいなくて、Aはきつとさびしいんだよ。

(9)において、Aの心理状態を容易に察することのできる話し手Bは、「Aはさびしい」という情報に高い確信を持っている。それは「きつと」という副詞で表すことができる。しかしBがいくら情報を確信していても、(9)

aのように話し手以外の心理を直接形で表すことは不自然である。話し手以外の心理を表す場合は、(9)bのように間接形を用いる必要がある。ただ(9)bにおいては、話し手の高い確信を表す「きっと」と、情報が不確かであることを示す間接形が共起できずに不適切な文となってしまう。これに対して(9)cのように「のだ」を用いると、話し手以外の心理について話し手は高い確信を持っていると表すことが可能になる。ある情報に高い確信があるということは、その情報が話し手のなわ張りに属しているということに他ならない。

このように情報の確信度という点においては、「のだ」は直接形同様、話し手が情報に高い確信を持っていることを表す。したがって「のだ」文の情報が話し手のなわ張りに属するとみなしてもいいはずである。問題は心理文における直接形と「のだ」の違いであるが、そもそも心理文に直接形が用いられるのは不自然であるという点について以下で改めて考察する。

例えば道でうずくまっているおばあさんを見て次の(10)のように言ったとしよう。

(10) *あのおばあさんはおなかが痛い。

日本語において、(10)のような文が不自然に感じる理由は、話し手が「おばあさんはおなかが痛い」という情報を得ることは不可能だと、聞き手側、または客観的な立場において判断されるからである。第二章で見たとおり、ある情報に対するなわ張りを設定し発話するのは話し手の判断によるものである。しかし、その文が自然か不自然かという判断は聞き手、または話し手以外の客観的な立場からなされるものである。(10)や(9)aにおいて、話し手自身は「おばあさんはおなかが痛い」「Aはきっとさびしい」という情報を確信し、自身のなわ張りに属すると判断していたとする。しかし客観的立場からは、文の表す情報が(4)で提示したいずれの条件も満たすとはいえない。情報が話し手のなわ張り内にあると客観的に認められない場合、「話し手の発話はなわ張り理論に反した不適切な文だ」と認めざるを得ないのである。

逆に言うと、発話を取り巻く様々な状況から考慮した結果、当該の情報が「話し手のなわ張りに入っている」と客観的な立場からも認められれば、

たとえその情報が話し手以外の心理であっても直接形を用いて表すことができる。つまり、(4)の条件が満たされていることを客観的立場で確認できればいいのである。次の(11)を見てみよう。

(11) 佐藤さんは悲しいです。

(11)は通常直接形で表すことのできない心理文である。しかし、例えば(11)の話し手が他人の考えを読み取ることのできる機械を開発し、それを使用しながら発話したとする。このような状況を考慮した上で客観的に(11)の文の適切さを判断すると、文の表す情報は条件(4)bを満たすので不自然ではなくなる。

小説などの書き言葉などにおいて第三者の心理を直接形で表すことができるのも、同じように説明できる。書き手は小説の登場人物の心理を知ることのできる立場であるということが、読者に、つまり客観的に認められているからこそ、小説の登場人物の心理は直接形で表すことが可能なのである。このように、ある情報が話し手のなわ張りに入るかどうかという最初の設定は話し手であっても、その情報が話し手のなわ張りに属するか否かは最終的に客観的な立場から判断されるということがわかる。

直接形と「のだ」における相違点は、以上で述べたような文の適切さを判断する過程にあると本稿では考える。つまり、「のだ」文には「情報が話し手のなわ張りに属するかどうか」という点について客観的判断が必要ないとすれば、心理文に見られる「のだ」の用法も説明できる。(10)の文に「の(ん)だ」を伴ったものが次の(12)である。

(12) あのおばあさんはおなかが痛いんだ。

(12)の情報は話し手以外の心理状態である。これを(10)のように直接形で表す場合は、話し手のなわ張りに属していると客観的に判断できないために不適切であった。(12)においても、話し手が情報を確信できるような状況は設定されていない。つまり(4)の条件を満たしているとは客観的に確認できないとする。しかし(12)のように「のだ」を用いて発話すると、情報を確信できるほどの状況がなくとも全く不自然ではない。これは、「のだ」文には直接形のように「情報が話し手のなわ張りに属する条件が客観的に認めら

れなければならない」という制限が適用されないからだと考えれば説明がつく。

「のだ」は、ある情報が話し手のなわ張りに属するかどうかという客観的判断を必要とせず、話し手の主観に基づいて判断しているということを明示すると考えられる。したがって、心理文についても、あくまで話し手の主観的判断に基づいて情報が自身のなわ張りに入ることを示しているのだから、客観的立場から文が不適切だとすることはできないのである。

もちろん、客観的立場から話し手のなわ張りに属すると判断できる情報に「のだ」を用いることも可能である。通常「のだ」文と直接形の文に大きな意味の違いが見られず、「のだ」の意味が判別し難い理由もそこにあると思われる。拙論（2004）でも述べたが、話し手の内的直接経験である(13)のような情報は直接形でも、また「のだ」を用いても大きな意味の違いが見られない。

- (13) a. 僕、少し吐き気がする。
- b. 僕、少し吐き気がするんだ。

(13) b では話し手の主観的判断に基づいて、文の表す情報が話し手自身のなわ張りに属すると示されている。しかし、この情報は話し手の内的直接経験に基づいており、(4)の条件 a を満たしていることから、話し手のなわ張りに属する情報であることは客観的にも認められる。(13) b における話し手の主観的判断と、これに対する客観的判断が一致しているために、(13) a の直接形の文と(13) b の文に大きな違いが現れないのだと思われる。ただし心理文以外にも「のだ」と直接形の違いを見ることができるところがある。次も拙論（2004）で提示した例である。

(14) は映画『Love Letter』での一場面である。(14)の話し手が死んだ恋人宛に手紙を書いたところ、返事が来た。このことについて友人と話し合っている場面での会話を一部提示する。

- (14) うん、だから、やっぱり彼（話し手の恋人）が（返事を）書いているのよ。それでつじつまが合うじゃない。
- （映画『Love Letter』スクリプトより 下線及び括弧内は筆者による）

(14)の話し手が「恋人が手紙の返事を書いている」と話し手が断定する根拠は、恋人宛に手紙を送って返事が来たということだけである。しかし恋人がすでに亡くなっていることは周知の事実であり、聞き手にとって、つまり客観的にこの情報は話し手のなわ張りに属するとは判断しにくい。にもかかわらず話し手は、「恋人が書いている」という情報を断定、つまり自身のなわ張りにある情報と信じている。このような状況においては、直接形ではなく「のだ」が用いられるほうが自然であると思われる。それは、「のだ」が用いられることによって(14)の情報に聞き手からの客観的判断は必要ないということが示されるからである。(14)では、たとえ聞き手が信じていなくとも、話し手自身はその情報を確信しているということを「のだ」で表していると思われる。

また、情報が一般的真理を表す場合についても直接形の文と「のだ」文では扱われる状況に違いが見られる。この点については神尾(2002)も、「のだ」に対する見解ではないものの、本稿の考察につながるような説明をしている。

(15) 月の重力は地表の6分の1です。 (神尾 2002: 29)

(15)のような情報は、百科事典等において通常直接形で表される。神尾(2002)によると、これは百科事典の著者が専門家として(15)の情報を所有しており、かつ読者がその情報を知らないものと想定されているために直接形が用いられるということである。つまり(15)の情報は(4)の条件cを満たしていることが客観的に認められ、情報が話し手のなわ張りにあると判断できるのである。神尾は(15)に続いて、一般人が子供を相手に話した場合として(16)を提示している。

(16) 月の重力は地球の6分の1なんだよ。 (神尾 2002: 29)

神尾は「のだ」がなわ張り理論と無関係と考えているため、ここでは(15)と同じく(16)でも直接形が用いられるとしている。しかし(16)の話し手にとって、自らが提示した情報は専門分野でもなく、もちろん自身の経験に基づいた情報というわけではない。つまり(4)の条件のいずれも満たしていないので、話し手のなわ張り内にある情報とは認められないはずである。それでも(16)

の話し手は聞き手である子供に対して情報が自身のなわ張りにあると示すことができる。これに対する神尾の説明は、「S（話し手）は情報が自己のなわ張りに最も深く入り込んでいると想定するか、そのふりをすることが出来るからであり、またH（聞き手）は子供なのでそれを全く知らないか、ほとんど知らないと想定し得るからである」（神尾 2002：29-30 括弧内は筆者による）というものである。

(16)について本稿で注目すべき点は、(15)の場合と異なり「のだ」が用いられている点である。通常「のだ」が真理を述べる文に用いられることは多くない。しかし、(16)のように聞き手が子供であるような場合は、「のだ」を用いても自然である。その理由は、「のだ」によって、たとえ当該の情報がなわ張りに属するための条件を満たさずとも、それが話し手のなわ張り内にあると然るべき情報だと、十分な知識がないと思われる聞き手に伝えているからだと考えられる。したがって「のだ」文で表された情報は一般的に疑いのない真理だということが聞き手に伝わるのである。神尾が述べた「なわ張りの最も深く」という説明も、その情報が客観的判断の材料になる(4)の条件を適用する必要がないほど、話し手のなわ張り内にあると当然であることを表すと考えられる。また「自己のなわ張りに入り込んでいるふりをする」という説明も、話し手の主観に基づく判断であることを意味していると考えられるのではないだろうか。

本稿では以上の考察から、「のだ」文によって提示された情報が直接形の文と同じように話し手のなわ張りに属することを示すと考える。直接形と「のだ」の異なる点とは、直接形の示す情報が「話し手のなわ張りに属する」と客観的に認められる必要があるのに対して、「のだ」文の情報はあくまで話し手の主観的判断のみで話し手自身のなわ張り内にあると明示できることである。以上のような直接形と「のだ」の違いはあるものの、本稿の考察から「のだ」のなわ張り理論への位置づけは可能であるといえる。

3.2 間接形+「のだ」

なわ張り理論への「のだ」の位置づけを不可能にするもう一つの理由が、間接形に「のだ」が伴う場合である。2.2で見たとおり、「のだ」は直接形や終助詞「ね」、また「だろう」に接続できる一方で、間接形とも接続することができる。したがって、「のだ」を直接形あるいは間接形の一種と

するのは難しいということであった。しかし、3.1での考察に基づき「のだ」が「話し手の主観的判断により、ある情報が話し手自身のなわ張り内にある」ことを示すとすれば、間接形に「のだ」が接続されても矛盾しない。この点について以下で詳しく述べる。

ここでは間接形として「みたい」と「らしい」をあげて考察する。「みたい」「らしい」は話し手のなわ張りに属さない情報を示す文末表現である。これらの形はどちらも言い切りの文に接続し、また名詞文に伴う場合は「名詞+みたい」、「名詞+らしい」という形をとる。

- (17) a. 彼、昨日ここに来たみたい。
- b. 彼は昨日ここに来たらしい。
- c. 日本語の発音からすると、韓国人みたいだね。
- d. 新聞記事によると、その人は韓国人らしい。

「みたい」「らしい」の文に「のだ」を接続したのが、次の(18)である。
(18)はなわ張り理論と「のだ」を無関係だとみなす理由の一つにあげられる。

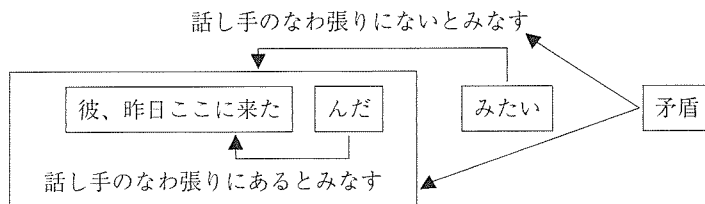
- (18) a. 彼、昨日ここに来たみたいなんだ。
- b. 彼は昨日ここに来たらしいのだ。

(18)でわかるとおり、間接形「みたい」「らしい」を「のだ」とともに用いるのは全く問題がない。しかし、この接続の仕方には制限があるのも事実である。「のだ」と「みたい」「らしい」を接続する場合は、終助詞「ね」や「だろう」とは異なり、必ず「のだ」が「みたい」「らしい」の後に接続される。逆に「らしい」「みたい」が「のだ」文に接続されると、その文は不適切となる。(「の」は元来文を名詞化する形式であるが、「の」によって名詞化された命題を通常の名詞文と同様「みたい」「らしい」に接続することも不可能である。)

- (19) a. *彼、昨日ここ来たんだみたい。
- b. *彼は昨日ここに来たのだからしい。
- c. *彼、昨日ここに来たのみみたい。
- d. *彼は昨日ここに来たのらしい。

以上のように、「のだ」と間接形の「みたい」「らしい」では接続の順番に制限がある。これについて、本稿の仮説に基づいて以下のように説明できると思われる。

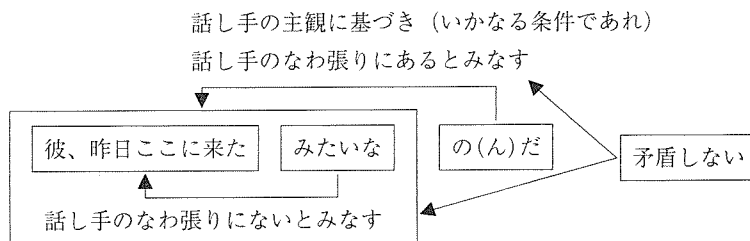
②0 「*の(ん)だみたい」が許容できない原因



②0は、(19 a)の話し手が「彼が昨日ここに来た」という情報をなわ張りのどこに位置づけているか図に示したものである。3.1で考察したように、「のだ」は「彼が昨日ここに来た」という情報が話し手のなわ張り内にあることを示すとする。しかし、これは話し手のなわ張りに属さない情報に接続する「みたい」と矛盾するため、(19 a)の文は許容できないことになる。(19 b、c、dについても同様の説明をすることができるだろう。もし「のだ」が話し手のなわ張りに属さない情報にも伴うのであれば、このような矛盾は起きないはずである。「のだ」文に間接形を後接することができないのは、「のだ」文の情報が話し手のなわ張りに属する情報とみなされているからだと考えられる。

一方(18)のように、間接形を伴った文に「のだ」を接続することは不適切ではない。これについても(18 a)を例にとり、話し手が情報をなわ張りのどこに位置づけているか図示する。②1がその図である。

②1 「みたいなの(ん)だ」の解釈



ある情報に間接形が用いられるということは、その情報が(4)で提示した条件をいずれも満たさないということである。しかし3.1で考察したなわ張り理論における「のだ」の機能が正しければ、文の示す情報が(4)の条件を満たしていないとしても、話し手の主観的判断でその情報がなわ張り内にあると「のだ」によって明示できる。つまり(18)では「彼が昨日ここに来たみたい／らしい」という「推量の情報」が話し手のなわ張りにあることを、話し手自身の主観的判断に基づいて示していると考えられる。

神尾が指摘したとおり、「のだ」と間接形はともに用いることができる。しかし、その接続には間接形を伴った文に「のだ」を後接しなければいけないという制限があり、「のだ」文に間接形を後接させるのは不適切である。このように接続の順番に制限が見られるのは、たとえ根拠が不十分であれ、情報が自身のなわ張りに属すると話し手自らが判断していることを「のだ」が示すからだと考えられる。

4. まとめ

本稿では神尾の「情報のなわ張り理論」の枠組みに文末形式「のだ」が位置づけられるかどうかを検証した。神尾は、自身の提示したなわ張り理論に「のだ」の機能は無関係であるとした。その根拠となった二つの事象について本稿の第三章で考察した。

考察の結果、「のだ」は提示された情報が話し手のなわ張りに属することを示す文形であるということがわかった。同じように情報が話し手のなわ張りにあることを示す文形には直接形がある。この直接形と「のだ」の異なる点は、直接形の場合、提示された情報が話し手のなわ張りにあると客観的にも認められなければならないのに対して、「のだ」文で示された情報は話し手の主観的な判断だけで話し手自身のなわ張り内にあると明示できる点にある。したがって、なわ張り理論の枠組みに「のだ」を位置づけることが可能であると本稿では結論付けた。

「のだ」をなわ張り理論の枠組みに位置づけられたことには二つの意義があると考えられる。一つは、これまで限定された範囲の言語形式しか説明ができなかったなわ張り理論であるが、その枠組みに新たな文形が取り入れられることがわかった点である。なわ張り理論を用い、神尾が分析した以外の言語現象が説明できたことで、この理論の発展の可能性が見出されたと思われる。もう一つは、これまで多岐にわたる意味機能が提示され

てきた「のだ」についても、なわ張り理論に基づいた語用論的観点からの分析が期待できる点である。⁴⁾

現在のところ、なわ張り理論によって分析できる範囲は平叙文に限られており、本稿でも「のだ」が用いられた平叙文についてのみ考察した。今後なわ張り理論に基づいた疑問文の分析など、一層適用の範囲を広げていくことが望まれる。また、なわ張り理論の適用できる範囲が広がることで、「のだ」の意味機能についてもより明確に記述できると期待できる。⁵⁾

注：

1) どのような文末形式を間接形とするかは考察の余地があると筆者は考える。例えば「かもしれない」は「みたい」「らしい」と異なり、次のように高い確信を表す副詞と用いることができる。

(i) 確かに彼は強いかもしれない。

したがって「かもしれない」は不確定なことを表す間接形的一种というよりも、「成立する可能性のある事態が二つ以上ある」という意味の断定表現と考えることもできる。杉村(2001)においても、文末に用いられる「かもしれない」は推量の「ようだ」のような話者の態度を表すモダリティ表現ではなく、命題として機能していると述べている。

2) 発話時の想定は話し手によるもので、実際聞き手が当該の情報をどの程度認識しているかは話し手の想定と異なる場合がある。以下の(ii)の場合、話し手Aは聞き手Bが「旭川は寒い」ということについてよく知っている想定して発話しているが、次の発話ではBがよく知らなかったということがわかる。

(ii) A：旭川は寒いらしいですね。

B：そうらしいですね。実は僕、2歳までしか旭川にいなかった
ので、よく覚えていないんですが。

3) 「だろう」の場合、文末のイントネーションが下降調か上昇調かで、話し手と聞き手が情報をどの程度認識しているかに違いが生じる。「だろう」が用いられた文の情報は、話し手と聞き手どちらのなわ張りにも

入っていると想定される。ただし文末が下降イントネーションの場合、話し手はその文の情報を確信しているのに対して聞き手は話し手ほどよく知らない。文末が上昇イントネーションの場合は逆に、聞き手の方が話し手より情報をよく知っていると、話し手によって想定されている。さらに終助詞「ね」を伴った場合、「だろう」も間接形として機能することがあると神尾（2002：24）は述べている。

- 4) 拙論（2004）ではなわ張り理論に基づいて「のだ」の意味機能の記述を試みている。
- 5) 岡本（1996）はなわ張り理論を疑問文に発展させていく可能性を示唆している。同じく岡本は、疑問文において「のだ」が用いられる場合とそうでない場合の自然さの違いについて実験で明らかにしており、それをなわ張り理論のモデルにどう組み込んでいくかを今後の課題としている。

参考文献：

- 岡本 真一郎（1996）「情報への関与と文末形式－「情報のなわ張り理論」の批判的検討と新モデルの提案－」『心理学評論』Vol.39 No.2 pp.168-204
- 神尾 昭雄（2002）『続・情報のなわ張り理論』大修館書店
- 杉村 泰（2001）「現代日本語における文末表現の主観性－ヨウダ、ソウダ、ベキダ、カモシレナイ、ニチガイナイを対象に－」『世界の日本語教育』第11号 pp.209-224
- 田野村 忠温（2000）『現代日本語の文法Ⅰ－「のだ」の意味と用法』和泉書院
- 中野 友理（2004）『日本語の「のだ」文の持つ特性と言語普遍性－韓国語との対照から－』平成15年度北海道大学大学院国際広報メディア研究科修士論文
- Kamio, Akio（1979）“On the notion Speaker's territory of information: A functional analysis of certain sentence-final forms in Japanese,” in Bedell, George D., Kobayashi, Eichi, and Muraki, Masatake, *Explorations in Linguistics: Papers in Honor of Kazuko Inoue*. Kenkyusha.

The function of Japanese *no-da* in the theory of territory of information

NAKANO, Yuri

This paper aims to explore the function of *no-da* in the model of Kamio's (2002) theory of territory of information.

Two reasons why *no-da* cannot be located in this model have been offered by Kamio (2002). We re-examine these reasons and claim that information of *no-da* sentences is indeed located in the speaker's territory. Though direct forms are also used to indicate that information is in the speaker's territory, there is a difference between *no-da* and direct forms. Information expressed by direct forms indicates an objective judgment that the information meets the conditions to be in the speaker's territory. On the other hand, *no-da* indicates that the information is in the speaker's territory based on the speaker's subjective judgment. There is thus no necessity for information in *no-da* sentences to meet the conditions which are needed for information with direct forms. This function of *no-da* also allows *no-da* to be used in sentences with indirect forms. *No-da* with indirect forms indicates that information supposed to be out of the speaker's territory is in speaker's territory by his/her judgment. From the above discussion we conclude that *no-da* can indeed be located in the model of territory of information.